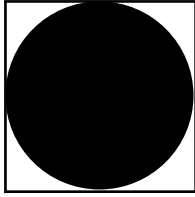


InSEA



公益社団法人 日本美術教育連合 ニュース

No. 155

2019. 4

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-30-14 文京ビル 206 号

公益社団法人 日本美術教育連合

発行人 理事長 大坪圭輔

ニュース担当 北川智久

E-mail: info@insea-in-japan.or.jp

図画工作・美術を「オンリーワン」に導くヒント

理事 山口喜雄

「ナンバーワンよりオンリーワン」との有名な楽曲の明言を春先によく耳にする。小・中学生が好む教科を統計調査に基づき考えてみたい。折しも、2019年早春から統計調査不正が社会問題化している。統計調査は、全数調査と一部に対する標本調査に二分できる。後者には「標本誤差」が生じるが、民間大手のベネッセ教育総合研究所による1990～2015年に5年毎5回の調査が興味深い。都市（東京23区）・地方都市（四国県庁所在地）・郡部（東北地方）の約2,500名の5年生を対象とした四半世紀の「好きな教科・活動ランキング」の平均で、なんと図画工作は1位、体育、家庭と続く。中学2年生対象で美術は2位、1位は体育、3位音楽。図画工作「ナンバーワン」、美術「ツー」の人気である。

図画工作を「とても好き」と「まあ好き」の合計は常に1～3位、86.6～75.8%で推移、平均82.3%。2位と0.3%の僅少差ながら1位の要因は二つと考える。授業を児童一人一人への「教師の愛情表現」と文部省編『新しい学力観に立つ図画工作の授業の工夫』1995年刊に明記され実践されている。また、教材のとらえ方が他教科と異なり面白い。具体的なモノを従前の概念を越えてとらえ直し、モノに働きかけ、モノを変容させる学習活動体験を通して英知（wisdom）を身につける教科であるため。

けれども、2年生が2位に選んだ美術は手放しで喜べない。1位の体育が平均65.4%、美術は2～6位、56.3～46.3%で推移し平均50.3%であった。ローウェンフェルドが「青年期の危機」と特筆した時期に、図画工作82.3%と比して32%も後退し、非専門担当増とはいえ、美術専門教員が教えていても「美術は大切」と認識されていない。筆者が20数年間の教員養成で出会った学部生や諸講習での非専門教員に「美術を大切」と思えなかった理由を尋ねたら、1）うまく描き表せない、2）真似はダメといわれた、3）得手・不得手の学習者への態度差が嫌、4）得意な人のための教科と思っていた等々であった。これらの真意に日々の授業でどう本気で取り組むかが問われている。「オンリーワン」へと導くヒントは、本ニュースの東良雅人先生の講演、5月12日（日）の総会記念講演にきっとある。

2019年度第9回定時総会 招集通知

下記の要領で定時総会を開催いたしますので、会員の皆様はご出席のほどをお願いします。

□日 時：2019年5月12日（日）13：00～14：15

□場 所：東洋大学白山キャンパス2号館16階スカイホール

□議 案：・平成30年度事業報告の件 ・平成30年度決算など

詳細は連合ホームページをご覧ください。 <http://insea-in-japan.or.jp/>

ご欠席の場合は、委任状を必ずご送付ください。

□記念講演：14：30（入場無料です。会員以外の方もお誘いあわせの上ご参加ください。）

講演者 文化庁文化戦略官 根岸 恭子 氏

演 題 「文化芸術振興と造形美術教育」（仮）

第52回 日本美術教育研究発表会2018 総括

研究局 結 城 孝 雄

去る2018年10月14日（日曜日）に東京家政大学 16号館におきまして、第52回日本美術教育研究発表会が開催されました。今年度の応募件数、発表件数は42件、となりました。ネットでの応募が定着して、北川運営委員、笠原運営委員 佐藤仁美局員には設定、情報集約にご尽力頂きました。その後の運営にも集約された情報が共有されて、論集編集の際にも運営がスムーズに進めることができました。

また、概要集編集にかかわり、藤井運営委員、赤木局員には短時間での校正を完了していただき、速やかに概要集が発行でき、林運営委員には、全体から俯瞰していただき、修正点を示唆していただきました。研究局の一致した協力体制での準備ができたと思います。

当日の参加者は、参加者数103名の参加があり、東京家政大学 家政学部長 手嶋尚人先生にも終日、ご参加いただき、活発な研究論議が繰り広げられました。

懇親会も、和やかに執り行われ、会員持ち込みのお酒やワインに談笑が広がりました。



第 52 回美術教育研究発表会 2018 2018(平成 30 年)10 月 14 日(日)

会場:東京家政大学 16 号館

主催 公益社団法人 日本美術教育連合 後援 文部科学省

9:30	受付開始				
9:45	開会式 会場A 161A教室 発表者控え室 162A 2F				
9:55	会場A161A (理論等)	会場B161B (実践小)	会場C161C(実践中高大)	会場D162B(ICT/幼)	会場E 162C(海外/特支)
10:00	A-1 日本美術教育連合「山形文庫」の全体像とその可能性 筑波大学 箕輪 佳奈恵/直江 俊雄	B-1 小学校における共同制作版画の意義と可能性について — 私の実践を通して — 日本版画院委員 中條 秀憲	C-1	D-1 プログラミングを取り入れたインタラクティブな表現 題材の実践 東京福祉大学短期大学部 井上 昌樹	E-1 City and Goutry School(N.Y.)における統合的な授業づくりと教師教育～「美術と他の学問領域」をめぐるパートナーシップの考察～ 東京学芸大学大学院 連合学校教育研究科 伊東 一誉
10:25					
10:30	A-2 フロー理論を基にした学習環境デザインの研究 東京学芸大学附属 小金井小学校 守屋 建	B-2 図画工作における鑑賞と表現に関連させた指導—ゴッホ『星月夜』の鑑賞から学び表現させた実践報告— 東京都千代田区立番町小学校 長田 千春	C-2 産官学連携による真図のまちづくり —廃材を活用したアートプロジェクトの事例から— 國學院大学栃木短期大学 名取 初穂	D-2 モバイルムービーの実践と高校生の学習行動の関係～「学校 CM プロジェクト」の報告より～ 神奈川県立相模向陽館高等学校 片桐 彩	E-2 美術鑑賞における省察的学習を促す方法に関する考察 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 劉 桂桂
10:55	休憩 (20 分)				
11:15	A-3 戦後の美術教科書における掲載作品の研究(19)～20 世紀後半以降の日本美術教科書の巻頭文と掲載作品の検討— 元 宇都宮大学 山口 喜雄	B-3 「小学校英語を図画工作の中で使って学ぶ」実践報告 東京学芸大学 大学院 新川 美湖 西武学園文理小学校 リチャード・ガイ	C-3 芸術を主体とした学外活動が学力に及ぼす影響について —アートパークの活動から— 聖徳大学短期大学部 北沢 昌代	D-3 幼児教育における「造形遊び」の課題を環境構成に着目して考察する —アートプロジェクト(大成ゼミ)の実践を通して— 聖徳大学大学院 佐藤 牧子	E-3 シンボル・システムとしての描画:自閉スペクトラム児者との思考の共有に向けて 東京学芸大学大学院 連合学校教育研究科 細野 泰久
11:40					
11:45	A-4 美術科教育における表音・表意文字の意味と色彩感情の関係 中村学園大学/佐賀市立小中一貫校富士校小学部 姉川 正紀、姉川 明子	B-4 児童の美的経験からはじめる図画工作授業実践の研究 東京学芸大学附属 世田谷小学校 大櫃 重剛	C-4 保育者志望生を対象とする木工制作体験の教育的意義 —授業観察と省察的ワークシートに基づいて— 東洋英和女学院大学 三上 慧	D-4 触覚と手指の動きと視覚的触覚に関する—考察—泥団子作りから始まること— 群馬大学大学院 多胡 宏	E-4 日本の国際協力における基礎教育分野の造形美術教育 —質的分析による技術移転に関する地域比較— 東京学芸大学附属 竹早中学校 山田 猛
12:10					
12:15	論文投稿者説明会 12:15—12:30		昼食(12:15—13:40)		
13:40					
13:40	A-5 教科横断的な視点に基づく「思考スキル」と美術科教育 東京家政大学 東京学芸大学大学院 連合学校教育研究科 畑山 未央	B-5 子供達が図画工作科の授業をどのように経験したのかに関する教師の理解 神戸市立義務教育学校 港島学園小学部 小田 恵子	C-5 教員養成課程における深い学びを目指した対話型アート活動に関する研究 目白大学 佐藤 仁美	D-5 VR、AR、ドローン等を活用した造形教育の実践—テキストマイニングを活用した分析から教育的意義を考える— 宮城県登米市立 北方小学校 宮崎 敏明	E-5 秋田&フィンランドの「視覚美術・工芸」教育交流展の実践研究報告(2) —高等学校相互交流開催へのプロセス— 秋田公立美術大学/秋田県立西目高等学校 尾澤 勇/黒木 健
14:05					
14:10	A-6 駅前広場の裸像は芸術か?—前橋駅前「建設」《希望》像の考察から 群馬大学 大学院 梶原 千恵	B-6 図画工作における版画の表現についての考察～版画の偶然性に着目して— 八王子市立宇津木台小学校 戸室 鉄平	C-6 身近な事物をとらえ直すためのプログラムの研究 —アートゲームの実践を通して— 東洋大学 北澤 俊之	D-6 アナログとデジタルを行き来して表現する特別支援学校における美術の授業実践 沖縄県立島尻特別支援学校 小橋川 啓	E-6 行事に向けた学習における制作活動 —主体的に取り組む姿を目指して— 宇都宮大学教育学部附属 特別支援学校 坂本 綾子
14:35					
14:40	A-7 図画工作科における創造活動を通して「造形的な視点」の研究Ⅲ—感受と意味の理解について— 東京学芸大学 西村 德行	B-7 児童の主体性を引き出す図画工作授業実践の研究(3) —低学年の鑑賞活動について— 沖縄カトリック小学校 矢澤 聡	C-7 「朝鑑賞」の取り組みと成果報告Ⅱ 武蔵野美術大学 三澤 一実	D-7 幼児の造形表現と遊び行為におけるイリックス 鶴見大学短期大学部 鮫島 良一/海野 阿育	E-7 美術実践に基づく美術鑑賞教育: 韓国伝統美術の教材化に向けての試み 韓国春川教育大学校 柳 芝英
15:05					
15:25	休憩(20 分)				
15:25	A-8 中大(院)連携プログラム I「Roots 私の美術展」—大学院からのアプローチを中心に— 熊本大学 赤木 恭子	B-8 テキストから豊かに紡ぎだされる視覚イメージの考察Ⅱ: 国語教科書の詩「銀河」が描く言葉と絵の関係 東京学芸大学大学院 連合学校教育研究科 松井 素子	C-8 アーティスト・イン・スクール(AIS)の可能性～教員×アーティスト×生徒の可能性とは・様々な実践と今後の展望～ 群馬大学大学院 住中 浩史	D-8 知的障害児における ICTを活用した造形授業の実践 I—ミライの体育館™による色彩学習を事例に— 筑波大学附属大塚特別支援学校 森 芸恵	
15:50					
15:55	A-9 学習指導要領図画工作・美術における「発想・構想」概念の展開 東京学芸大学 山田 一美	B-9 一人一人の「きめる・きめ直す」を生かす図工授業のプロセスデザイン ～主体的・対話的で深い学びの図画工作授業改善の一具体として～ 筑波大学附属小学校 笠 雷太	C-9 中学校美術科と国語科の教科融合型学習の研究(2)～津久見色辞典とアートと言葉新聞の制作～ 大分大学/大分県教育庁 津久見市立第一中学校 藤井 康子/木村 典之/永松 芳恵	D-9 子どもの美的体験における比喩的イメージの活用と課題Ⅶ—イメージ・スキーマの役割と機能— 東京家政学院大学 立川 泰史	
16:20					
16:25	閉会式 会場A 161A教室 ～16:40				
16:45	懇親会 ルーチェ 16 号館 1F 一般:2500 円 院生・学生 2000 円 お酒寄付歓迎				

日本美術教育連合「造形・美術教育力養成講座」について（報告）

「日本美術教育連合」は内閣府の承認を得た造形・美術教育にかかわる唯一の公益社団法人です。公益事業として、毎年連続講座を実施し、子どもと造形表現をめぐって理解を深め、講義と演習を通して教育実践力を高める講座を行っています。

現在、AIに代表される科学技術の発展や社会構造の変革などが急速に進行し、多くの企業やNPO、福祉法人など様々な団体が美術鑑賞や鑑賞教育に期待しています。公益とは、「みんな（社会）のための利益」です。美術教育を、教育関係だけでなく、企業やビジネスマン、高齢者介護など様々な分野に開き、美術教育を広げ、より社会に貢献することが求められているといえるでしょう。

第4期は、「美術教育ワークショップ－越境し、拡張する美術鑑賞－」というテーマを設定しました。幅広く講師を選定するとともに、講座の日時、場所、内容等を工夫し、2コマ（90分×2）で構成した講座を、全体で4講座（合計8コマ）を開催しました。また、WEBを活用し、参加者の申し込みを容易にしました。2/3以上を受講し、規定を満たした参加者の方に、公益社団法人日本美術教育連合からの「認定書」を授与します。来年度は、本年度の課題を改善し、より充実した連続講座を来年度企画したいと思います。（事業局担当理事 奥村高明）

1. 第1回講座「アートと社会のこれからの関係を考える」

（1）日時及び場所：2018年12月9日（日）（株）アマナ天王洲アイル本社

（2）内容：講演＆ワークショップ

（3）講師：上坂真人先生（アマナ執行役員）

（4）概要報告：講演の前半では活性化するアートマーケットの現状と課題が報告されました。講演の後半ではアマナが挑戦するアートのある生活提案の具体例が紹介されました。長野県の東部、浅間山の裾野に広がる御代田町は、東川町を超えるような写真文化を通じたまちづくりをめざしています。閉館したメルシャン軽井沢美術館の跡地や施設を活用して、将来、写真美術館が設立される予定です。今夏は、写真の魅力や楽しさをまち全体で感じ考える場として「浅間国際フォトフェスティバル」が実現しました。一流企業が視察に來たり、地域と人々の関係が変化したりした実践が奉公されました。ワークショップでは、プラチナプリントという世界最高峰の技術で制作された芸術写真が飾られているアマナ本社を展覧会場としてギャラリートークが行われました。（奥村高明）



2. 第2回講座「越境し、拡張する美術鑑賞」

（1）日時及び場所：2019年1月13日（日）武蔵野美術大学 デザイン・ラウンジ

（2）内容：講演＆ワークショップ

（3）講師：杉浦幸子先生（武蔵野美術大学）

（4）概要報告：まず前半にアートと社会をつなぐデザインをしてきた杉浦先生の今日までの活動の報告がされました。イギリスでの留学体験、そしてフリーランスで子どもと鑑賞する活動を始めたこと、そして森美術館での取り組みなどが紹介されました。後半は、講師自ら持参したコレクション作品12点を使って、短歌を詠むワークショップに取り組みました。まずはそれらの作品をじっくり見る鑑賞から始まり、好きな1点を選び短歌を作る。その後グループごとに渡された1作品について作品から抽出できる情報や、ネットを使って得られる情報を収集し、それらを全体で発表し合いました。また講師が直接作家に電話でインタビューを行うなど、作品の理解や解釈が広がった上でまた2度目の短歌を詠む活動を行いました。（三澤一実）



3. 第3回講座「ポストモダン以降の美術制作と鑑賞 ―【風景芸術】を巡って」

- (1) 日時及び場所：2019年2月9日（土） 聖心女子大学4号館
- (2) 内容：講演&ワークショップ
- (3) 講師：田窪恭治先生（美術家）
- (4) 概要報告：講師の田窪恭治先生は、サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂の再生プロジェクト（林檎の礼拝堂）によって、フランス政府より芸術文化勲章（オフィシエ）を受賞された日本を代表する美術家です。前半では、近代から現代へ至る時間帯の中で、日常性を基軸とした美術作品/行為が拡張しつつありますが、今回の講座ではキーワード【風景芸術】を軸に、芸術や教育の可能性について講演が行われました。田窪先生と社会的時間軸に関わる大変興味深いエピソードが中心でした。後半は、大学構内の壁画「黄金の林檎」の鑑賞会と、参加された方への色紙サイン会が急遽行われました。その場で、田窪先生が、受講者の一人一人へ温かい言葉をかけている姿が印象的でした。美術界、教育界という枠組みを越境した講義内容でありました。



（水島尚喜）

4. 第4回講座「絵の具の種類とその特徴を生かした制作 ―身近材料の可能性」

- (1) 日時及び場所：2019年3月9日（土） 聖心女子大学
- (2) 内容：講演&ワークショップ
- (3) 講師：大塚義孝先生（公益財団法人美育文化協会）
- (4) 概要報告：本講座は、画材の研究開発に長年取り組んでこられた講師の大塚義孝先生と、補助者2名の方とによって、充実した指導体制がとられました。講座の前半は、画材基礎講座として、描画材の基礎をパワーポイントと実物の展色剤等によって、具体的にわかりやすいレクチャーが行われました。後半は、絵の具や固形描画材の基礎・遊び方を多様に実践できる場が構成されました。香辛料やトッピング材料などの食品を用いた絵の具づくりと、それを活用した作品づくりに、感覚が目覚めてきました。次は、数人で巡回させて、協働で創り出す絵。デカルコマニーあり、表裏が相違する絵あり、透明シートで挟み込んだり、エプロンに転写したり等々と、いつまでも描いていたい濃密な時間が流れました。

（藤崎典子）





公益社団法人日本美術教育連合主催

《造形・美術教育フォーラム2018》の記録

□演 題 **新学習指導要領施行と
幼稚園から高等学校までを通した
美術教育の展望**

□日 時 **2018年12月23日（日）**

□場 所 **首都大学東京秋葉原サテライト**

□講 師 **東良 雅人 先生**
ひがしら まさと

□講師紹介

1962年 京都市生まれ
1985年 大阪芸術大学美術学科卒業
1987年 京都市立中学校教諭
2002年 京都市教育委員会指導課指導主事
2011年 文部科学省教育課程教科調査官
2018年 文部科学省初等中等教育局視学官

75名が参加した《造形・美術教育フォーラム2018》で東良雅人先生が行った講演の要点は次の通りです。

みなさん、年末三連休の中日に沢山の方々にお集まりいただきありがとうございます。美術教育連合から、このような機会をいただき感謝いたします。とても大きなテーマをいただきましたが、新学習指導要領の全面実施により子供たちの学習が豊かな学びに繋がるようにと一生懸命お話しいたします。

最初に学校の中の芸術教育担当が文化庁に移管されたことに触れておきます。文科省再編で学校教育課から文化庁の参事官付の中に芸術教育が移りました。結論からいうと方向転換ではなく、戦後以降のこれまで通りで、変わりはありません。芸術教育の本質をさらに追究していくということです。詳細は省きますが、2018年9月28日の文部科学省設置法の一部改正施行に、学校における芸術教育に関することは中教審で審議されるとしています。先生方はご心配なく、これまで通りに教育に邁進して下さい。

では、子供たちの姿から見ていきます。(ビデオで様々な表現過程を視聴、個々の解説は略し要点のみ記載) まず、小学生の子供たちのいくつかの例です。最初は失敗でも、最後に見せにきたとき「ここがよくできたね」と具体的にいってあげることが大切ですね。別な子供の作品ですが、半年後にその学校の先生がその後の変化を伝えてくれました。教師がやらせたいことを押しつけるのではなく、子供たちがやりたいことができていく授業であることが大切です。子供たちはいろいろな経験をしながら、自分の表現というものを身に付け、自分の表現に自信をつけていきます。中学3年生でも、使うことを考えずに制作してしまい上部の重さを支えられなくて悩んでいました。試行錯誤して、後半にはその問題に気づいて重さを支えられるようになりました。美術を専門にやってきた者には、それくらいのことはと思うことでも、子供たちが表したい気持ちをどう表したいのかに寄り添って授業を



〔写真〕 前頁左はフォーラム2018のフライヤー、同右は講演する東良雅人先生、本頁は大坪圭輔理事長の挨拶。

進めていくことが重要だと思います。高校工芸の染色の授業では、自分の表現したいようにするのではなく、海外交流を考えた風呂敷という題材設定で、伝統工芸という観点や素材から理解させていく観点もあります。鑑賞も、風呂敷の中に何を包むか、どのように包むかという全体像を考えて模様が包んだ時にどの位置にくるかなど先に知識を与えて意味が理解できるようにすることが大切です。自分の作品を一步離れてみたり、誰にどんなことを伝えたいのかという条件を考えることも必要です。子供たちは自己・他者・生活・社会・文化などとの関係性の中で、描いたりつくったり、鑑賞したりする経験が大事になっていきます。幼児や小学生の時期だけでなく、中学生や高校生になってもこのように多様な表現や鑑賞の機会をつくります。関係性は、発達の段階や子供によって違いがあるからです。この関係性を指導者がしっかりと把握して進め、学習環境を子供たちの側から考えていくことが重要かと思えます。資質・能力の育成という観点から、子供たちのことをよく知り、社会と繋がって様々なことを考え、自分を振り返る学習ができる授業にしたいですね。学習のねらいを先生と子供たちが共有して進めたいです。

自転車の運転に例えてみます。感覚がつかめないと自転車には乗れません。感じをつかめるように、指導者がちょっと手を添えてあげることが必要です。でも、ずっとつかみっぱなしでも困りますね。先生がハンドルをしっかり握って、子供たちはペダルだけこがされて、どこへ行くのか分からないのもダメです。子供たち一人一人に自転車を与えられても、「自由」放任にされているのでは、教育の意味があるのか、学びがあるのか。それは、放任されているだけで教育とはいえないと思います。自転車を与えられ自分で走れるようにしていても、目的地とスタートだけでなく、左右の壁が固められているのも困ります。子供自身が気づいて課題を乗り越え、一人一人が自分の答を見つけ、学ぶ意味や価値をつくっていくのが大事です。同じねらいでも、どういう道筋で進めていくかを見とりながら授業をすることが大切です。

今回の学習指導要領改訂には、「2030年の社会と子供たちの未来」が書かれています。2065年には日本の人口が3割減で、4割が65歳以上の高齢者になり、日本が世界のGDPに占める割合や国際的な存在感の低下が叫ばれています。AI（人工知能）の急速な発達で、現在の子供たちの65%が今存在していない職業に就き、47%の仕事が重層化されると予測されています。2015年12月野村総研の発表によれば、旋盤工のような「〇〇工」という職業が30種、「〇〇事務員」が15種の他は代替の可能性が高い。逆に、「人工知能やロボット等による代替可能性が低い100種の職業」には、教育関係13種、医療・福祉関係他が含まれています。昔は夢物語だったIOT《Internet of Things》、あらゆる物がインターネットを通じてつながることがという時代になってきました。狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、新たな社会を指す（Society 5.0）と内閣府は提示しています。サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、（Society5.0）は人間中心の社会です。IT技術の発達に対する一例ですが、「現実世界を理解し意味づけできる感性、倫理観、板挟みや想定外と向き合い調整する力、責任をもって遂行する力」が人間の強みといえます。これから共通に求め



られるのは、「文章や情報を正確に読み解き対話する力、科学的に思考・吟味し活用する力、価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」です。これからは、「児童生徒一人一人の能力や適性に応じて、個別最適化された学びの実現」が必要で、学校の在り方の見直しにも繋がります。美術の中だけで図画工作や工芸を考えるのではなく、もっと大きな視点に立って教科を捉える必要がこれまで以上に大切になります。社会の変化への対処の観点では、これからは生き難くなっていく。受け身でなく、子供たち自身が社会を創造していくことをめざしながら、それを指導できる若い先生方を育てることも大切だと思います。

感性と創造性という言葉が次のように答申に在りました。「子供たちが活躍する将来を見据え、一人一人が感性を豊かにして、人生や社会の在り方を創造的に考えることができるよう、豊かな心や人間性を育ていく観点からは、子供が自然の中で豊かな体験をしたり、文化芸術を体験して感性を高めたりする機会が限られているとの指摘もある」と、芸術部分でなく一般の全体に書かれています。続けて、「人工知能がいかに進化しようとも、それは与えられた目的の中での処理である。一方、人間は、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出すことができる」として、感性や創造性はあらゆることの源泉となり、「変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること」としています。これほど感性や創造性が書かれた答申はこれまでになく、繰り返しますが、人工知能やロボット等の代替性と関係しているわけです。芸術ワーキンググループ内だけでなく、先生方のほかに一般社会で美術や芸術に関わる方々と子供の学びを中心に据えて大きな枠組みの中でやっていくことが大切です。

「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性」という三つの力で、例えば、中学校美術の「知識及び技能」は、発想や構想・鑑賞による資質能力に関係しています。けれども、国民の多くは詳しく知らないのです。「思考力、判断力、表現力等」は他の教科でもできると考えやすい。ですから、美術という教科の本質を子供たちに確実に身に付けさせていく。教科のもくろみで改訂したのではなく、全体を通して各教科の現行の目標を維持し再整理して掲げられたのです。

(関連する幼稚園・小学校・中学校・高校での多様な授業実践を例示されましたが、略)

大事なことは、先生が「感性や想像力を働かせる」「対象や事象を造形的な視点で捉える」「自分としての意味や価値をつくりだす」ということを理解されても、指導の仕方を変えなければ、子供たちの学習態度はよりよく変わりません。「やるべきこと、やれること、やりたいこと」をやってほしい。全ての子供たちは優れた存在、学ぶ存在です。作品をつくるのみの「扉」だけでなく、森を見る視点から、子供がいろいろな扉を見つけられるように、「なぜ、美術しなければならないの？」という子供の疑問に答えられる先生になってほしいと思います。ご静聴ありがとうございました。

〔監修：東良雅人先生/ 講演要約：山口喜雄〕



〔写真〕 前頁左・同右と本頁左は各グループ代表による発表、本頁右は謝辞を述べる橋本光明運営委員

□発表 グループ・ディスカッション

東良先生の講演を受講者9名前後のグループ毎に30分間ディスカッションして、代表を選び2分間で発表しました。

第1グループ

- 造形的な見方・考え方がわからない若手が増えている。作品主義の根強い考え方が未だ残っている。

第2グループ

- 森を見て木を見る。その往還が大切である。
- 中心にいる子供の活動や学び合いの価値を見とることが重要。その先に子供の作品がある。
- 子供たちが学んだことをマッピングして学びの過程を視覚化していけば、子供や教師にとって有意義な機会となるのでは。

第3グループ

- 世界規模で教育観や「知識」の捉え方に変容が起こっている。今の子供たちは、見たままに表現する、見たものに対して純粋に「綺麗だな」と感じるものが減ってきている気がする。子供たちは、教師の意図を付度して受け答えしている実態もあるのではないか。子供も学生も自己規制をして過ごしているように感じられる。
- 中・高で言われている資質・能力を、一律に幼児教育にも求めるのは無理があるのではないかと。(一方で、同グループ内で、無理はないという意見もあった) 高校段階になると、ある程度知識や技術を詰め込むというのが必要なかもしれない。その中で、どのように関わっているのかを理解することも大切にしたい。

第4グループ

- 子供たちの発達に合わせて教えていくことの重大さを痛感した。
- 教科書をベースに題材を選び、何をやらせていくべきかというところで、子供たちに何を学ばせていくのか、どう発想させていくのかというところも教師側の大事なところである。
- たくさんの扉に出会わせるという東良先生のお言葉があったが、幼児から高校までにたくさん出会わせることで、やるべきことをしっかりやっていくことが大事なんだという話になった。

第5グループ

- 東良先生の教科や指導に関するイメージがわかりやすく、頷ける部分が多かった。例えば、教師と子供が乗っている自転車の絵があったが、小中一貫や中高連携の取り組みの中で、班内の中学の先生が図工の授業を見た際に、「ハンドルを握っているのは子供じゃなくて先生なんだなと覚えることが実際にあった」という話がでた。

- 最後の扉のイメージだが、図画工作がもつ多様な価値を教師側がもつことによって、子供たちが図工室に来ることが楽しみになる。
- 図画工作＝作品をつくることではないという教科の本質というところを再確認することができた。
- 小学校にいと、芸術作品を他教科で取り上げることもあるが、教科によって学習のねらいや教材の扱いが変わることを踏まえると中学校でも教科横断的に学ぶことや、あるテーマに対して多角的にアプローチすることが可能なのではないか。幼稚園にも教育要領があるが、園の教育方針によって、子供たちと造形的な関わりがしにくいといった実態がある。教育的な理念はわかるが、子供たちの実態と与えられた教材が合っていない現状もあって、ジレンマを感じている先生もいる。

第6グループ

- 感性や創造性というキーワードの大切さを改めて感じる事ができた。
- 図画工作・美術の授業は、教科書を1ページ1ページこなしていくのではなく、何のためにやっているのか、目の前の子供たちを一番大切にして、子供の学びの自由とプロセスを大切にすることを再確認した。子供の能力を引き出していくということに関して、子供たちへの丁寧な言葉かけを行ったり、実態を把握したりしていくことももちろん大事である。同時に、時間についてのマネジメント、カリキュラムをどう組んでいくか、1年単位だけではなく、(中・高ならば) 3年間をどう使っていくかを見通すことも大切だという意見が出た。

第7グループ

- 序盤は美術館と学校について議論になった。横のつながりをもつための主体的な関係がテーマになった。美術館は教育のことをもっと知る必要がある。学校では、児童がキュレーター役を担う活動を行うなど美術館訪問が単なる「イベント」にならないよう、系統性のあるつながりの工夫を紹介し合ったりしていた。
- 高校で教育をする人材が危機に瀕しているのではないかと。講師が点在している状況にある。その高校で学んだ生徒が幼稚園教諭になった際の、美術や造形に対する素地が足りないのではないかとという見解があった。そのような意味では、大学まで見通した人材の育成という視点が重要であるという意見もあった。絵を描くということが、社会に開かれた教育課程という意味でどう位置付けられるのかというところに話が及んで、自己の内面を見つめていくということがそのまま社会にどう関わっていくかという点で盛り上がりを見せているところでディスカッションの時間が終了になってしまった。

第8グループ

- 授業の工夫の大切さ。題材名を工夫することで、何を指すのか、何の授業なのかが明確になる。子供の意欲向上につながる。素材の重要性。幼少期からスマートフォンに触れる機会が増え、造形に対しての正念場。日本は発達障害の子が増えている。
- 今日の講演のポイントで、それがうまくいけば犯罪を止めることもできるのではないかと。鑑賞の大切さ。恣意的になっていないか。美術館でそうになっていないか。自分の価値観や意味が大切であることが議論された。社会とのつながりの大切さ。学校内にとどまらず、地域と連携するために、教師が地域に出向いてお願いをして、地域と子供をつなげる努力が大切。

[発表要約：畑山未央]

参加 75 名の内訳			
所在都県		校種等	
東京	38	小学校	14
神奈川	21	中学校	11
埼玉	6	高校	5
千葉	4	短大	4
長野	1	大学	18
愛知	1	行政	6
兵庫	1	美術館	7
福岡	1	出版社	3
未記入	2	一般	5
		学生	2

□運営

(役員名・敬称略)	
企画	理事会・運営委員会
開会の辞	長田謙一 14:00～14:03
理事長挨拶	大坪圭輔 14:03～14:08
講師紹介	山口喜雄 14:08～14:10
講演	東良雅人 14:10～15:50
グループ協議・休憩・発表	15:50～16:35
謝辞閉会の辞	橋本光明 16:35～16:50
司会	山口喜雄
会場	長田謙一・北澤俊之(懇親会)
広報	北川智久・大坪圭輔・三澤一実
大標示・名簿	結城孝雄
講師との連絡	奥村高明
会場入口案内	立川泰史・小林貴史・畑山未央
写真音声記録	小林貴史・畑山未央・山口喜雄

□担当

平成30(2018)年度総会で「美術教育連携交流担当」が新設され、2ヶ年度のフォーラム等を次の3名が担います。



橋本光明・山口喜雄・長田謙一

The Asia Regional Council (ARC) の設立について

国際局局員（InSEAアジア地区評議員） 佐 藤 真 帆

2019年1月5日のInSEA世界評議会の会議でアジア地区評議会（The Asia Regional Council、略してARC）の設立が承認されました。設立の目的は、アジアの美術教育関係者がコミュニケーションをとって美術教育の活性化に貢献することです。

この度のARCの設立のきっかけは、2017年の韓国・テグでのInSEA世界大会でのアジアのラウンドテーブルでアジア各国の美術教育者が協力していくことの重要性と方法について議論されたことです。アジア各国の参加者からアジアの美術教育活性化のためにグループが必要ではないかという提案がありました。その後、アジア代表評議委員が中心となり提案書と規約を作成し、世界評議委員会会議で議論を重ね、承認されました。規約はヨーロッパ地区評議委員会（European Regional Council）の規約を基に作成し、検討を重ねてきました。まだ検討の余地はありますが、大筋完成です。今後、アジア地域に合ったものにしていくことも、ARCの重要な仕事となっていくことでしょう。

2018年9月の香港でのアジア地区大会では、InSEA会長のTeresa Ecaが中心となり、アジアでどのようなことがしたいか、可能なのかということを学会参加者でインフォーマルな形で話し合いをしました。実践プロジェクトから始めることを計画してみようという動きがあり、現在、アジア代表評議委員が中心となって計画しています。

現在、ARCの中心（Executive Board）となるメンバーの立候補者を募っています。アジアの美術教育発展のために研究や実践を促進し、InSEAの活動を広めるために活動できる、リーダーシップのある方を探しています。2019年7月のカナダでの世界大会中にARCの第1回会議を開催予定です。

美術を通した多様性の受容はInSEAの重要な活動意義でもあります。これまでInSEAで活動してきた経験からも、近年、アジアの美術教育に興味、関心が集まっていると感じています。アジアの美術教育の理解と発展はその他の地域の美術教育の活性化につながるのではないのでしょうか。

事務局便り

■会員の異動（敬称略）

〈入会者〉家崎 萌、海野阿育、加瀬倫有、小池研二、小山美香子、杉坂洋嗣、
竹丸草子、萩野谷洋一、吉野榮子、リチャード・ガイ、笠 雷太
〈退会者〉水島尚喜、渡辺 満

■『日本美術教育研究論集 第52号』が発刊されました

すでに会員の皆様のもとに届けられていることと思いますが、今号も充実した内容の論集となりました。執筆者の皆様ありがとうございました。また、会員の皆様におかれましては、本年度も積極的に研究発表・論文執筆をご計画いただき、これまでもまして美術・造形研究を盛り上げていただきますようお願い申し上げます。



■平成30年度（2018年度）会費納入、ありがとうございました

本会の運営は、公益に帰することを第一の原則として、会員皆様方の貴重な会費によって成り立っております。会員・賛助会員の皆様のご協力により、昨年度も研究発表・養成講座・フォーラムとそれぞれ大きな成果をあげることができました。引き続き、皆様のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

なお、3年連続会費未納入の会員様につきましては、残念ながら「退会」の対応をとらせていただきます。何卒至急ご入金いただきますようお願い致します。また、異動等で住所が変わられた場合には、下記事務局アドレスまでご一報いただければ幸いです。

○昨年度（平成30年度）会費未納の方は、会費6,000円を下記まで納入してください。

【郵便振替】（公社）日本美術教育連合 郵便振替00170-1-86036

○お問い合わせ先（事務局）

〒112-8606 東京都文京区5-28-20 東洋大学文学部教育学科 北澤俊之

E-mail : kitazawa@toyo.jp

■ 2019年度 第9回定時総会 招集通知 ■

巻頭ページでもご案内しましたように、2019年度第9回定時総会を下記のように開催いたします。総会後の記念講演にもあわせて多数ご出席いただきますよう、お願い申し上げます。

■日 時 2019年5月12日（日） 13:00～14:15

■場 所 東洋大学白山キャンパス2号館16階スカイホール

東京都文京区白山5-28-20（都営地下鉄三田線白山駅より徒歩5分）

■ 記念講演会 ■

（総会終了後14:30～16:00）

参加費 無料

■講演者 文化庁文化戦略官 根来 恭子 氏

■演 題 「文化芸術振興と造形美術教育」（仮）

■定時総会「出欠はがき」の提出にご協力ください

総会成立の可否は、公益社団法人法によって厳密に規定されています。必ず同封の「出欠はがき」（委任状含む）を投函していただきますようお願い申し上げます。